(英和語羅馬字對譯挿入)
A translation to the English from the Japanese contained.

女學叢誌

驛遞局認可　明治十九年二月六日　毎土曜日發兌　第八號

此の繪の說明ハ本紙中ニ在り

The Engraving illustrated in another page.

東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地　發行所　績文舍

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學叢誌第八號目次

●官衙彙聞●幼稚園●娼妓學校●女學叢譚●妾が姉君妹御に知らす●歐米女學の技折●いろは游戯●西洋謎●數學ブッザルス●和英語羅馬字對譯●列女傳サシユリッチの話し（承前）●表壽傳（八）宮城野信夫の實傳●女學●女用文詞の解かし幷ひに活き●女男に先つハ不祥●料理の事●化粧のまき●菲芳詞苑●御伽草●机の塵●内外雜報
諸廣告

明治十九年二月六日

本誌代價表

壹冊	正價金四錢	此郵税壹錢
拾冊	同金三拾八錢	同拾錢
二拾冊	同金七拾五錢	同二拾錢
三拾冊	同金壹圓拾錢	同三拾錢
四拾冊	同金壹圓四拾錢	同四拾錢
五拾冊	同金壹圓七拾錢	同五拾錢

但シ東京十五區内郵税不申請

本舍ハ御注文有之と雖とも前金御送附無之間ハ叢誌配達不仕事に内規相定候に付御注文の節ハ必ず代價郵税共郵便爲替又ハ通運便にて御送附わらんとを希ふ○郵劵代用ハ御斷り申上候萬一郵便切手を以て代價御送附の節ハ壹錢切手にて一割増を乞
郵便爲替ハ芝區芝口郵便局へ御振込ミ其爲替劵を本舍へ御送附可被下候
但し東京十五區内ハ御斷り無之間ハ引續き配達仕候

明治十九年女學叢誌毎土曜日發兌表

一月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
二月	六日	十三日	二十日	廿七日	
三月	六日	十三日	二十日	廿七日	
四月	三日	十日	十七日	廿四日	
五月	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
六月	五日	十二日	十九日	廿六日	
七月	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
八月	七日	十四日	廿一日	廿八日	
九月	四日	十一日	十八日	廿五日	
十月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
十一月	六日	十三日	二十日	廿七日	
十二月	四日	十一日	十八日	廿五日	

廣告料定則

一行二十七字詰	壹回分	二回分	三回分	四回分
自一行至十行	八錢	七錢	六錢五厘	五錢
自十一行至二十行	七錢	六錢五厘	六錢	四錢五厘
自二十一行至三十行	六錢	五錢五厘	五錢	四錢
自三十一行至五十行	五錢五厘	五錢	四錢五厘	三錢五厘

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○官衙學校彙聞

○甲斐松代子　世も末に流れこせバ親しき疎きの差別なく澆情に移る習ひなるに玆に最殊勝の行爲ありて政府より褒賞を賜ひしハ甲斐松代子なり松代ハ鹿兒嶋縣下臼杵郡下野村甲斐總十郎の母にして資性も順良なる上へ自然ら道を知り能く父母に事へ考養怠たらず中年の頃父を喪ない尋きて所天も亦た病で歸らぬ旅に赴むきし不幸せのかさなる後ち文久元年の頃より母のりうハ眼病に罹りて百方醫療ゝ手を竭すと雖ども遂ゝ其しるしなく盲目となり又年を逐て老病漸やく加ハるに方りて日夜良醫師を諸所より招き或ハ自から扶擁へして嶮坂峻路を往來し之が治療を求むるなど二十餘年の間だ日一日の如く看病保養に誠を盡して力むと雖ども起とあらず明治十四年に至りて遂になき人かずゝ入たれバ松代の悲哀なんに譬へん樣もなく朝夕泣になきて飲食をら廢する程に至り且つ平素よく業を勉め篤實に子や姪を導びき一家親睦く六十年の長の間だ操行を守り更變らさりければ去る十六年十一月六日附にて賞勳局より左の如く賞賜せられたり(十九年一月廿六日官報)

鹿兒嶋縣下日向國　臼杵郡下野村　甲斐松代

其父母及夫存生中能く孝貞を盡し一家親睦玆に六十餘年志操一日の如し洵に奇特とゑ依て明治十四年十二月七日勅定の綠綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

○幼稚園　東京府師範學校の附属なる本鄕の幼稚園ハ追々此の園の必要を感ずる者增加し入園の申し込多分あるがゆゑ今の有樣にてハ手狹につき昨年より新築に取かゝられしが最早ほどなく落成すと云ふ

●娼妓學校　笑ふてハ輕薄の客を迎へ泣てハ無情の人を送り朝た夕べの攀折に身を苦しむ娼妓も元ハ良家の女子にして早晩か人の妻とならざるを得ず去れバ裁縫讀書とも知らでハ叶とて福岡縣下筑前國博多の柳町の娼妓一同か申し合せ翠糸學校と云を設け晝ま客なき時ハ一同此學校にあつまり讀かき裁縫等に勉強せしがはしめの程ハいろはのいの字も知らず針をもつ便さへ辨まへざりし者が此頃に至り追々と上達し今まで傍訓新聞ハ申すもさらなり弊舍の女學叢誌なども讀み又木綿絹の別なく衣服より袴とうに至るまで巧みに裁ち縫する樣ますゝみしとぞ文明の氣運已にかくの如し良家の令孃も娼妓

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に負たまひぞ

◎女學叢譚

○妾が姉妹御に知らす　丹治すゞ子

一筆志めしまゐらせ候寒わけ候てより何とあく心のどかに相成日かけも鶴の歩みと共に長ふ覺へ遠山の霞野邊のかけらう垣の梅の咲いんとすなる池の氷りの解んとすなる殊に鶯の初音若草の萌世いやう〱と春の景色を添へ火桶と睦みし去年の寒さを今ハふつに忘れ椽のはうに盆栽と親しむやう相成候ハ妾ハの身にハかきりなき幸と存じまゐらせ候然れば御心がまへなき方樣に卒爾に斯ると申し上候も如何かしく存じ候ふへ共おはけなくも妾ハ貴女方をもて姉君とも見又ハ妹とも思ひ候まゝ聞えし事を云バて止んハ心くるしう存じ候ゆゑふつゝかを顧りみず告け知らせまゐらせ候去つ頃亞米利の婦人に面會致し候ふし其婦人の申し候にハ斯く申そハ如何に候へども一体日本の女子ハ此國の惡しき習慣に染り居り候とハ云へ亞米利加にて聞とりしよりも倚は驚ろかれたる擧動のみ侍りて恰んと人の仲間に數へられぬ有樣と申すべし其ハ何んと申せば第一に人問と生れてハ世の時々の風情を辨へ人に面會して彼是と物語する位ハ尋常の事なるに日本の婦人ハ斯る心がゝハ毫しも御坐なく只だ寄と觸ると衣裝化粧の咄し又ハ他の女子のかげ事を云ひ或ハ芝居役者の風評どり〱などにて他に何の咄しもこれなく誠に此世の外の人とより見られ申さず吾儕日本へ參りしより心を盡し意を込て何故に斯る習慣に染り居るやを取調べ候ところ全たく文字讀とを厭ハるゝよりケ樣に相成候ものと察し候去ながら全たく文字讀とを厭ハるゝに御坐なく其證據にハ淫かましき人情本又ハ草双紙得も譯らぬ遊戯の本ハ喜こびて見らるゝも少しく其身の爲になり又ハ其生の兒の躾にも相成るべき益ある本と云は顔をそむけ手にだに取らず見ずものなと抛やらるゝ擧動あり誠になげかハしき事に御坐候抑も淫かハしき人情本又ハ草双紙其他芝居狂言の本を喜こび見る心ろと根氣とあらば一度其心ろと根氣を其身の爲其生の兒の仕付にも相成益ある本に移したらんにハ如何候や必らず人と面會して世の事柄を物語り時の有樣をも打語ると何の難きとか候られん然るに同じ心と根氣ありながら只だ無益の方へ用いらるゝハ是れ人の仲間とも思へぬ有樣に立いたりたる大本に候られずや今にして斯る惡き習慣を改ためされバ其子其孫も皆此の惡き習慣を受つきて御氣もじに候へども日本の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

後々ハ危ふき形たゞ至り申し候らハんか斯く申せば今の女子の身にのみ罪を着するゞ似て實に心くるしき譯に候ゆゑ最一段其事を詳しく申さんに今の女子の罪を申せば其實ハ親御様が淫がましき人情本又ハ草双紙或ハ芝居狂言の書物などを購めて與へ給ふ故と一ッにハ學校の教師が吾役ざけを教ふれバ他に用なしと云ふ不心切なる所ろより此處に至りし事と知られ候故に妾ハ外國人ながらも日本女子の爲を思ふに其親御をして無益の本ハ一切之を讀しめず學校の教師ハ其女子に教ふるに其擧動の家に在るも學校に在るも同じなる樣心切ゞせられたらんにハ早晩知らず識らず此の惡き習慣ハ已なんと考へ申し候間くれ／＼も此事を世上に知らしめたし。と咄され申し候間妾の姉君たり妹たる諸卿のたハ何卒／＼此の亞米利加婦人の申す旨を御承知遊ばされ人情本又ハ草双紙得も譯らぬ遊戯の本を見る心ろと根氣とを益ある新聞雜誌又ハ書物に用ひられ早く人の仲間に入たまハんことを願ひまひらせ候かしく

末筆ながら此譯御親御さまへも御つたへ被下やう呉々も
願ひまいらせ候

評　米國婦人ノ眼光。灼々照ス日本婦人之陋習ヲ敬伏々々

◎歐米女學の枝折

○いろは遊戯

拭月韻風樓重譯

いろは遊戯ハ此れ亦た諸々の名稱義理等を覺ゆるに必用なる遊びとなる殊に此の慰さみハ四十八人の人數までハなし得るとゆゑ一層樂しみ深し之を爲すゞハ先づ順番を定めいろは順ゞ從ひ各自其當る處ろの字を以て話し始め其話しにハ專ばら其當り字を用ふるなり而して若し其話しに誤まりあるか又ハ躊躇する事あれば罰を云ひ附る事とす其例左の如し〔い〕に當りしハ阿愛姐なり

阿愛姐〔イ〕妾ハい。と私くしの愛でる物と同じて有ます何と申せば彼ハ幼稚くして潔よく惠しみの心ろが有ばなり又妾ハ。いと共に彼を惡みまそ何と申せは偽るとと寢眠と意地のきたない事を爲ぱなり又彼の者〔イ〕妾が名を家屋の名に附て和泉屋と云ひ又古き緣故あればとて伊万里燒の花瓶と墨汁入を土產とて贈りました而して彼の名ハ市助と申し生れハ伊勢の飯野で御坐ります

阿年姐〔ロ〕妾ハろ。と私くしの愛する物と同しで有まそ何と申せば龍動より還りたる魯直な書生なればなり又妾ハろ。と

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

共に彼を悪みます碌々何とも爲そ路銀を遣ひ盡し遂ひに悪事をして露顯したる者なればなり又彼の者〔ロ〕妾が名を樓閣の額に書き髑髏首の御化の名まで用ひしと而して彼の名ハ六太郎と申し生れし地ハ六條通にて元來ハ六角堂の僧だと云ます

阿仁姐　〔ハ〕妾ハはと私くしの愛する者と同しで有ますそ何と申せバ彼が咄しハ始めより變りなく最とも早言ならされバなり又妾ハはと共に彼を悪みます彼ハ恥を知らず裸になり跣足で走り鼻歌うたへばなり彼ハ又花瓶の銘にも妾が名を用ひ盆栽の葉蘭まで妾が名を負せ而して彼ハ春吉と申して本國ハ播磨の果てあります

阿石姐　〔ニ〕妾ハにと一旦ハ彼を愛せり何と申せバ彼ハ俄かに任官し二等屬となりてニウヨークに二ケ年往り然るに今妾ハにと共に彼を悪む故あり彼ハ柔弱にして日本の名譽を汚す贋物にて二度吃驚の男なればなり而して妾が名を人形の號とし又濁酒雛とりの名に附けたり彼が名ハ仁兵衛と申し新潟縣の生れであります

阿順姐　〔ホ〕妾ハほを愛します其故ハ彼ハ誇らず慾がふず眞個の人なればなり妾ハ又ほと共に彼を悪む所由がありまそ彼ハ勞力せずして名譽を好むが本意と云り逆も本心とハ思ハれません彼ハ妾が名を棒に彫り書籍に記し鯨海扇等にも及ぼし而して名を星五郎と申し北越より來りたる蒙恩な男で商賣ハぽていふりだと申します

阿槻姐　〔へ〕妾ハへと私くしの愛する者を同じくします〔オヤ〳〵忌な物がおすき〕彼ハ諂諛もなく偏頗なともなく平素勉强斗りして居ます妾ハ又〔へ〕と同じく彼を嫌ひます彼ハ平氣にて謙退るとを知らず變な生質で御坐ります而して妄りに妾の名を取て蛇に用ひ絲に施こし屁の如く呼び做すを以てなり彼が名ハ辨六と申し平氏にて此頃彼得堡よりベーコンの著書を以て還りました

阿露姐　〔ト〕妾ハとと共に愛そる物が同じであります彼ハ超絶たり度量ありて東洋の富榮る事に年頃奔走ばなり妾ハ又とと共に彼を忌むと數ケ條あり第一富籤を好み時の流行に靡き第二に黨問を勤め統紀りなく第三に飛あがり者にて光陰を惜ます必らず仕舞にハ泥棒も致しかねません且つ彼が妾の名を以て鳶虎石蛇放蕩野郎等に及ぼし而して木賊鷄蔾橡實等の號とせり彼ハ土佐の者にて富樫時七と申し藤八拳を渡世とし東京に遊んでをります

（以下次號）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○西洋謎

(五) 余ハ昔しより有しとなし然れども將よわらんとするなり且ツ前々より余を見し者一人もあらざるべし女學叢誌を見る人も亦た余を見ると能ハず去れども此の地球上に住そる者ハ皆な余の來る事を信ずると最とも深し梅花の開らするを余に訴たへ守錢奴ハ余に利子の殖んとを禱り病ある者及び其看病人の如きハ最とも平愈せんとを余に禱るや深切なり夫の小年に至りてハ其結納せる新婦を娶らんと欲し余の來らんとを渴望する甚はた懇ころなり凡ろ世人の事を願ふ者ハ皆斯く願ハざるハなし今讀者ハ余の名を解當そべし而して事に向つて余に依賴そべからず其故何となれば世人ハ自からの欺むきを免もすれバ余が欺むくと爲せバなり

(六) 人ハ如何なる强勇ありて例令ば辨慶朝比奈の如き者と雖ども鐵門又ハ鐵の戸を自由自在に通ると能ハざるべし然るよ余が微少温柔の力を假せば容易く往來するとを得るなり又若し余が余の仲間を呼び集めて脱走せば天下の中等以上の人ハ如何なる不都合を感ずるや

○數學ブッザルス

(六) 十二ノ半分ハ七個ナリ其譯如何

(七) 玆に二個の人あり其兩手に金錢と銀錢とを握れり今何れの手の銀錢を握りしや又其金錢を握る手ハ何れなるや

◎和英語羅馬字對譯 (いろは骨牌)

(和) 屁をひつて尻すぼめ

(羅) He wo hitte shiri subome.

(英) One contracts his anus when he farted.
人ガ一 スボメル七 彼ノ五 尻ヲ六 時ニハ四 彼ガ二 放屁セシ三

(和) 盜のひるね

(羅) Nusubito no hirune.

(英) The sleep of a thief in the day time.
眠リ六 ノ五 盜四 於テ三 ヒ一 ルニ二

(和) るりもはりも磨けば光る

(羅) Ruri mo hari mo migakeba hikaru.

(英) The Emerald and glass polished will be clear.
瑠璃ト二 ソウシテ三 玻璃ガ四 ミガカレタル一 アラウ七 アルテ六 明ニ五

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

NAZO,

"Nazo wo kakeyō; me ga futatsu atte, ashi ga shi hon, hana wa zutto nagaku, ke no hayeta mono de shiroi mono wa nāni?" "Sore wa zō de wa nai ka ?" "Ō! yō toita, mō hitotsu kakeyō; kondo wa medama ga kokonotsu, hana ga shichijū hachi, mimi ga san zen ni hyaku jū roku, ashi ga roppyaku shichijū ku hon atte, iro wa shiroi yō de kurokn akai yō de kii na ke no nagaku hayeta mono nāni?" "Fū! sore wa mutsukashii, nan de arō yo, Sansaizu nimo Sankaikyō nimo sonna mono wa nakatta, kore wa shirenu ageta ageta" "Hate bukiyōna tsui shireru mono sa" "Hatena, dō kangayetemo shirenu, mā nande gozaru?" to iyeba:" Bakemono sa! bakemono sa!"

な(謎)ぞ

なぞ を かけよー め が ふたつ あつて あし が しほん はな は づつと ながく け の はへた もの で しろい もの は なーに それ は ぞー では ないか をゝ よー といた もー ひとつ かけよー こんど は めだま が こゝのつ はな が しちじう はち みみ が さん ぜん にひやく じゆう ろく あし が ろつぴやく しちじゆう く ほん あつて いろ は しろい よー で くろく あかい よーで きいな け の ながく はへた もの なーに ふう それ は むつかしい なんで あろー ぞ さんさいづ にも さんかいきよう にも そんな もの は なかつた これ は しれぬ あげた あげた はて ぶきよーな つひ しれる もの さ はてな どー かんがへても しれぬ まー なんで ござる と いへば ばけもの さ ばけもの さ（三才圖）（山海經）

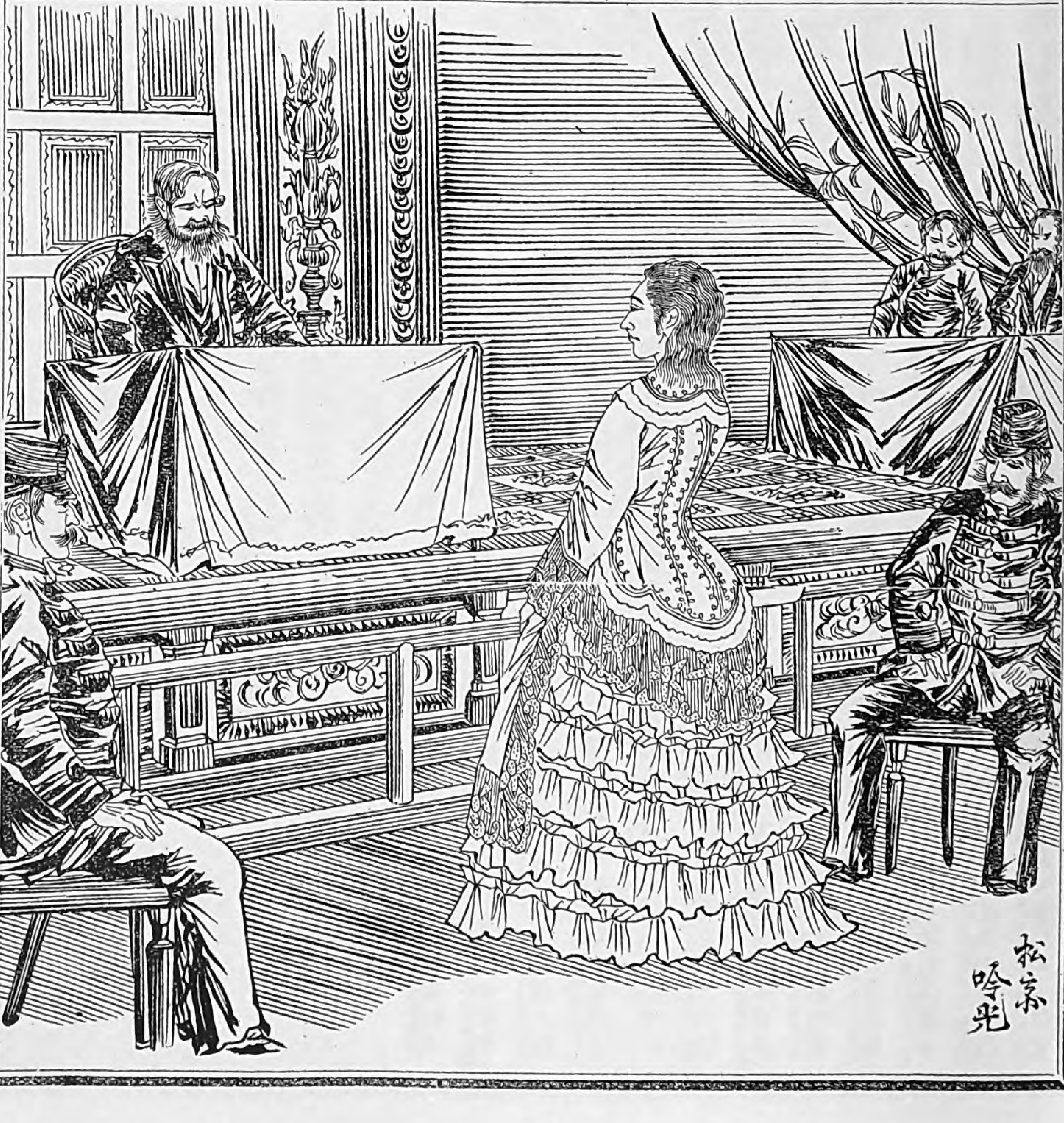
◎内外烈女傳

○サシユリッチの話し（承前）

惨々たる陰風暗壁に生じ沈々たる怨氣天闕に動く偖もウェラ、サシユリッチは憲兵ゟ擁護され法廷の直中にぞ引出され從容に長官ニコ公の前ゟぞ進みける」在廷の人々は官吏庶人の區別無く視官悉くサシユリッチの一身に集まり是ぞこれ一巾幗の身を以て當時朝廷に威權最も鋭き大警視兼陸軍中將ドレホフ氏を狙撃せし空前絶後の丈夫ぞ其容貌は如何あらん定めて骨相猛烈ならんと思ひの外の扮裝にて露重げなる薔薇花の風に悩める形況に皆一驚を喫せしとぞ茲にサシユリッチの容貌を評さんに中等に位する婦女にはいと稀なる温和の顔容ゟて面は桃花の初めて雨を帶びたる如く眉は柳枝に似て乍ちに烟を含む双垂の玉耳天然の美一點の朱唇分外に鮮なり目は横波の若く眞に俗ならず鼻は懸胆の如く果して非凡、粗衣斜めに掩ふて香頬を遮ぎり薄袖寒を忍んで玉拳を露わす一目して知る廿余歳の女子たるを唯だ痛む多くの春秋を狴里の中に數へ辛き艱難を嘗たるを以て柳眉の上に愁を含めるの痕を止め香頰の邊肉脱ちて慘然慷慨の氣象を露わそ偖も裁判長ニコ公

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ハ徐かにサシユリッチに打向ひ二言三言糺問の緒端を開かれたるにサシユリッチハ更に臆するいろなく肅然明瞭なる答辨を爲す時しもあれ裁判長の後に在りし年齢既に五十余り其顔猛く嚴めしく虎髯左右に逆生ひし大檢事ハつと身を起しサシユリッチを瞎然睨まへ鐘聲只ならざる大音を揚げ凛然慄然恰かも嚴霜苦雪の如く將に糺問を始めんとせしかばサシユリッチハ徐ろに大檢事の顔をさし覗き些しく俯して頭を廻らし並居る十二人の陪審官に愁を秋波に送りしかば陪審官の脳裏にハ無限の感覺を不與へけり時に大檢事は聲を揚げ兼てより召出し置し證人の其姓名を呼とひとしく應と答へて出來る其人く々ハ皆是れ政府の官吏にして嚮さ



百二十三

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に凶變の際其場に馳せつけ現場を目擊せし者共なりサシユリツチは元より罪を免るゝの心は露ほどもなく兼て期したる事とはいへ今面り証人等が尾鰭を添へての陳述を聞くと比としく花容忽ち紅を潮し芳心頓に裂くるが如く悲憤の情の堪へ難く我ともしらず欄柵を固く握りて突立たり」此時滿廷の傍聽者は千有余名に余れども寂寞として人無きが如く唾を呑み咳を耐へて沈默し音する者は折々に戸外を誘ふ春風や深山を出し諸鳥の鳴くもさすがに憐れなり」反て說く大撿事は証言一々聞畢り直ちに裁判長に打向ひサシユリツチが罪の論告を始め出し証據を擧げて事實を確かめ切りに裁判長及び陪審官の心を動かし有罪の判決を下さしめんと勉めつゝ猶も一條の確証を擧げて曰く被告サシユリツチは兇行の三日以前に市街の或る商店より一挺の短銃を購ひ求め謀殺の後其短銃を追手に擲付け今現に玆に在りサシユリツチの謀殺の爲めにせしは事實にして其罪は決して脫る可からずと喋々喃々論告するを傍聽席に聽居たる多くの人の其中には撿事の擧動に目をつけて其形況を覦ふに罪を羅織し徒らに刑を負せる面惡さに或は疑念を懷きつゝサシユリツチの罪は半ば虛妄に非ざるかと思へる者の無きにあらねど然りとて亦誰れが此論告を不當なりとする者あらねば憫れ此少女の運命は嵐待間の櫻花商秋夜雨の瞿麥よりいとも脆くぞ見にまける

〔以下次號〕

○表叢傳　〔八〕

○宮城野信夫の實傳

宮城野信夫の事芝居狂言又は坊間の草双紙に事々しく傳へ由井正雪をさへ加へたるはいよ／＼邪となり此頃月堂見聞錄てふ寫本を見しに其實事を傳へたり玆に原本の儘に記さん

松平陸奥ノ守(仙臺侯)御家老片倉小十郎殿知行所の内足立村百姓四郎左衞門と申す者去る享保三戌年白石と申す所にて小十郎殿劍術の師に田邊志摩と申し知行千石取候人在之候に行逢路次の供廻りを破り候とて口論に及び彼の四郎左衞門を志摩打捨被申候此の節四郎左衞門に二人の女子あり姉十一歲妹八歲。早速領内を立退仙臺に住居いたし罷あり候て陸奥ノ守樣劍術の師に瀧本傳八郎殿と申す方へ兄弟ともに奉公に罷り出て忍び／＼に劍術を見習ひ六ヶ年の間だ劍術修行致し候或る時女部屋に木刀の聲頻りに聞へ申候間だ傳八郎不審に存せられ伺がひ見られ候處ろ右の二女劍術稽古の樣子に候へば傳八郎子細を尋ね申され候處ろ報讐の心入のよし物語申し候に付傳八郎感心淺からず此ゟ彌々以て修行いさせ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

密々に秘傳申し聞され候由。高千石の處ろ傳八郎今度二千石に御加增仰せ附られ名を土佐と改めし其次弟ハ當春陸奥守樣彼の二人の女子が寸志を遂させ度と御願ひ申し上候に付敵田邊志摩を片倉小十郎殿方より申し受られ仙臺の内白鳥大明神の社前宮の叶と申を處ろに竹矢來を膳らひ當卯の三月双方立合勝負仰せ付られ候。此日仙臺御家中衆ハ警固撿分として御出役あれ有り。見物人ハ町方在郷より前代未聞の事といやが上におし重なりておびたゞしき事に候ふひし

〔未完〕

○女學

○女用文詞の解かし幷びに活き

●御ことぶきハ常に壽の字を充て書り。此の壽きハ實ハことほきよほをふと誤まれるなりほくほき又ほさくなど云て祝て賞はやす詞なり

●候へさふらハん。さふらひ。さふらへ。と活く詞なり候ハ元くさもらふと云て主君の御前に仕ふの意なり。されば發語まと同じらふハるの延たるにてまもるなり後世武士をさむらひと云も必らず君の御前に仕へて守る職也其の稱なり。昔しの用文よハ侍るとのみ遣ひて候ハ遣ハざりしを西行上人なぞの文に見へしが始のやうなり。侍るハ元來這在にて君の御前に侍りて御用やわらんと待居貌ちなり。守ると侍坐するとの輕重あり去れば詞にハ輕き方の侍るをのみ遣ひしなり。今はべると云ふ詞ばハ何にやら耳たちて候の方の專ら行なハるゝも世の移り變る有樣と知られたり

●遊ばしハ敬ひ詞よて被成の意。あろばさん。遊ばし。あろばす。あそばせ。又遊ばされ。遊バさる。なぞ活らくなり。遊び。遊ぶ。の方ハ遊山遊興の方につゐて云ふ。あそべん。あろべども云る詞なり。此詞バ自他二ッの活らき種々あれども常にあまり用なければ云ず

●入ハ御入待たてまつり候なぞ云ハ我家へ御出あれと云ふ意にて。いふん。いり。いる。いれ。又いらせられ。いらせらる。ハ御出なさるゝといふ敬ひ詞ばなり皆な出入の入なり

●御機嫌よくゐらせられの方ハ居るにて御坐被遊と同じ。入せられにてハ假名遣ひと知べし

●まゐらせハ。人に物を進上するなり。又敬ひ詞にも遣ふ。奉つるの輕きなり。まゐらせ。まゐらす。まゐらする。まゐらすれ。とも活く又候どろへても遣ふなり。まゐらせ。奉るなどハ遣ハずまゐらせの文字ハ俗の造字なれバ遣ハぬ方よろしきなり

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

●おはしまそれ御坐まそにて御坐遊ばされと同じ元來敬まひ詞ばなれども下へも遣ふなり。おれさん。おはし。おれす。おはせ。又おれするなどと活らくれ別なり。御坐の文字に當れど御坐と書れよろしのらず又先の人の上に附て御無事にれれしましなどれよろし。暖寒さなどにつき寒さ強くれれしまし又何々に御坐候など書れよろしからず

●渡らせれ是より彼へ。又世を渡るなど同じ御暮被成候と同じ日を送るとなり

●可被給れ可被下とれなじ

●御賜ものれ下され物と同し上より下へ下さるなり。又我より人よ年甫の物をおくるを年玉と云れよろしからず受る方にて申すれ差支なし。玉れらん。たまれり。たまれる。玉れれ。活らく。たまへたまふなど自他の差別ありて種々活らけど省く賜物いふ時れ一ッの体言となるなり

●めでたきれ愛の甚だしきにて愛痛きなり結搆又美事立派などの意なり。めでたく。めでたし。めでたき。などゝ活らく愛さのさ文字れ形狀言なり。高さ低さのさの如し

ちやのゆ

○茶の湯の事

堺の趙陶齋が茶の湯の事れ家々の傳わる樣に由せども畢竟痴人面前夢を說くが如く思れるゝなりと申されければ或宗匠れ左の歌を書て示しければ左も有なんそれにて相譯り候と申されしとかや

花見よりかへりし客に茶をださば花を活ぬが茶の湯なり𠮷

丈我翁

○女男に先つれ不祥

神代卷に伊奘諾ノ尊伊奘諾冉ノ尊立於天浮橋之上ニ。陰神先ッ唱テ曰憙哉遇フ可美少男ニ焉陽神不ソ悅曰吾ハ是レ男子理當ニ先ッ唱フ如何ッ婦人反テ先言ヤ平事既ニ不祥宜以テ改メ旋ル云々近代情死の男女を呼に先づ女子の名を呼ぶ不祥これより大なるれなし。世に云なそ阿染久松。浦里時次郎。阿初德兵衞。梅川忠兵衞。阿七吉三此糸蘭蝶。阿俊傳兵衞。阿駒才三。夕霧伊左エ門。阿花半七。阿さん茂兵衞。の類ゐまづ女子の名を呼で次に男の名を云ふ

○昔しより久松阿染。時次郎浦里忠兵衞梅川とれ呼ぬなり此れ彼の陰神の先に唱へたる不祥と同じ易の雷澤歸妹の兌の少女先に在りて震の長男後にあるの象なり此封妹歸と名けずして歸妹と名づくるれ不致妹歸歸く妹とありと云ふ義なり故に上九ニ先ッ女承ケ筐ヲ死シ實と云ひ後に士刲ニ羊ヲ死シ血と云ふ夫婦と云ずして女士と云ふ淫乱の男女を惡んでなり

いんらん

○淸巖茶話〔一〕

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○清輔供奉申されけるに歌の御會ありしに人々の歌みな出來たれども清輔一人久しく案じて遲く出されたり清輔なれば人もゆるして中々遲のりしも苦しからざりき其歌よ

としへたり宇治の橋もりとヾれん幾代になりぬ水のみなかミ。此歌ハ宇治のはし守より末ハ皆いできて五文字が如何わんせられけれどもなかりし程に久しく案せられけるなり。餘りに久しかりし間だ力なくて年經ぬるの五文字を小さく書て出されけるなり是ハ實よ不足なる五文字なり

○何やらんに源氏をバ取らす心を取と書たりと覺へ侍るが歌をも多く取はべるなり。思ふかたより風や吹らん。とあるを

袖にふけさそな旅ねの夢もみしおもふのたよりかよふうらかせ。と讀はべる袖よふけとハねのひたる也たびねハ寢ふれねば思ふ方よりの風ハ袖にふけとなり

◎女紅

○料理の事

女紅の中に於て裁縫の肝要なるとハ今更申そに及はず之に次く者ハ料理の方法なり一家の細君にして料理を知らされば其費への夥多しき事ハ中々數へ盡されじ故に前號の本誌叢譚に於ても之を詳しく申したり玆に叢譚の意を嗣て料理の方法を記さん

○春の献立

○活物

汁　燒海老　若和布　干大根　芽うど

鱠　片木さゞゐ　細魚皮つき　獨活短冊　栗生薑　密柑

杉燒濃燒　赤貝和ら烹　川たけ　慈姑　すり山椒

二の汁　潮　大伊勢海老たいて岩茸湯

指身　生鯖なげ作り　ゐづの子　ほうれん草赤根斗り　生薑す味噌

酒ひたし　奥津鯛　もみさゞゐ　密柑

和物　生椎茸　玉子のきミ和

ひたし物　長田貝　くこ　山椒醤油

水和　五嶋するめ　花鰹　よめ菜　密柑

煮物　鰯　松露　巻豆腐　青海苔

燒物　鯛の切身みそ漬

臺引　鱚　小板浦鉾

吸物　糸はんぺん　輪きり密柑

取肴　ふハ／＼鯛

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

香の物　澤庵大根　かぶら

○精進

汁　赤味噌にて　菜づな　小椎茸　そり生薑

膾　胡麻酢　獨活　椎茸　佐倉蒟蒻　栗生薑　密柑

濃焼　丸湯波　川たけ　丸麥　長芋　摺山椒

二の汁　薄ずまし　巻湯皮油あげ　つくし　防風

指身　よせとさの　獨活短冊　糸ふき　ふきのとう　酢味噌

酒ひたし　漬松茸　よしめ　花密柑　梅酒

和物　川たけ　白あへ

浸し物　七草ふり胡麻

氷和　氷豆腐　つくし　よめ菜　角生薑　汁　胡桃

煮もの　あは麩　わらび　鹽松茸　はなゆば

焼物　わらび天麩羅長切

臺引　ひもかハ温飩油あげ

吸物　巻海苔　うくひす菜

取肴　煮蒟蒻　わり胡椒

（以下次號）

○結びの記

此の記ハ元來伊勢貞丈大人のものせる所ろなり今文章を平易にして初學の人々に譯り易き樣傳へ參らすべし

およそ紐をむすぶ事さまざまあり今そのしなじなを集めて茲に記すところとなりぬ此中よ用にたつと立ぬとあるべし用に立ぬ結びも昔しより有て古き物語などにも女子の紅事をゑがき花結びとなど云ふハ此事なり用に立ぬ結びありとて捨可らず事に觸れ物に寄て用ふる事あるべし斯る事を知るハ難く捨るハ易し淺きとなりとて輕んず可らず況てハ物語書の講義などに必要の出來をや

結び樣の品々

●こま結び又こまの結びと云ハ常のまむすびの事なり又玉むすびとも云

●かたわなと云ハ片々にわなを造るを云わなハ左になし端ハ右になすべし（ひつとゆとも云）（又かたがきとも云）

●もろわなと云ハ兩方よわなを造るを云なり右の三品ハ常々人の知たる結び方なり（又もろがきとも云）

●とんぼう結びとハ右のもろわなの事なり

●うのくびと云ふ結び一名ハ龜くゝし。又鴨さけ。鴨くゝし。わさぎ。かしすけとも云ふ。結びやう左の如し（又かけむすびと云て鷹の鳥に山緒かける時の結び樣あり

（圖ハ次號）

○化粧のまき

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○出尻を隠し風俗をよく見する法

容貌ハ假令見にくからぬも尻の出たるハ風俗を悪しく見ゆとりのそる者なり之を隠し風俗をよく見する方法ハ身丈を整理とし耳と肩と眞直にならべ身体を極目立ぬやう少し身を反心持にて鼻の先と臍とを眞直にそろへて歩行けハ出尻かくるゝものなり其上帶をたらりと下て尻のあたりを隠せバ身体ハ整理して少しも出尻と見へず是れ身体の延る故あればなり足の運びも爪先にて歩く心持にすべし踵をあまり推つけて歩くハわろし

○啼鳥

福島鳥を撰むにハ其色の淡色にして勇悍なる容貌ちあり而も目の明烱として善く端直く起立する者を取べし之を撰みし後ハ別の籠に入れよく啼音を吟味そるを要す蓋し此鳥の愛る所ろハ一に啼音にあれバなり凡ろ福嶋鳥を飼て之に雛を生せしめんと欲せば左の方法に據らざる可らず

先づ强壯なる福嶋鳥を撰び三月の中旬ごろ雌雄を一ッ籠の中に入れ其孳尾を見認なば其孳尾後に於て更に之を孵卵籠に移すべし(此の孵卵しの籠ハ常の籠に變りなけれども其中に棚を設け且つ巣を作るべき材料を備へねくなり其材料ハ他の鳥の柔かき毛及び極く細く柔かき枯草なり)斯くすれば四五日を過る頃ハ必らず巣を作り始むべし而して三ッ乃至五ッの卵を生み十四日にして其卵を孵そ者なり此鳥の孳尾とき及び雛を養なふ時ハ之に與ふるに卵麪包と皮を剝たる菜種少しバかりを以てし又時々苣の葉二三片を與ふるをよじとそ而して第六月及び第八月に至りて芭蕉の實を得るとあらバ之を與ふを最とも佳とす斯の如くして其雛の漸やく長じて自から食物を食ふ様よ至らバ別の籠に移し且つ之に與ふるに蛋黄と皮をむきたる菜種と少し麪包の入りたる摺餌を以てし日々之を剝にして其羽毛の全たく變り了るに及んで老鳥の如くなりなば菜亞麻及び栗の實の末を以てすべし

(以下次號)

◎群芳詞苑

○海邊千鳥　本郷　大松つま子

去は風の枯葉ふきしくはま萩にこゑうちそへてなく千鳥かな

○寒月　おなしひと

花もみちあとなき庭の木枯にのこるもさむしありあけのつき

○待雪　おなしひと

さそひ來てつもらむ雪の花もかなあらしいろなき庭の梢へに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○鏡　おなじひと

ますかゞみうつるそのたを見るとにくもる心のはつかしき哉

○女學叢誌を讀て　上田　花月

乙女子よかざしの花ハまつをきてめてもてはやせ玉の言の葉

○東京名所百首　任天居士

○上野公園　（一）

百千たび見れともあかぬ上野やま世のちるあきを外に置けん

○王子權現與熊野同坐　（二）

立なからこすへの緑れくふかみくまの〻暮のこゝちこそすれ

○隅田川　鷗舊作　（三）

常とはに隅た河原のみやことり今をまちゑし名にやありけん

○靖國神社舊招魂社　（四）

天皇の御代をまもりとつるぎ太刀さやかに見ゆる神の赤心ろ

○飛鳥山　（五）

飛鳥山けふいてこせよみやこ人ゐすれあらしのありと云なり

○學の窓　濱町　大戸たね子　十三年二月

まどのへに積る白ゆき夜な〳〵に我をこたりをせめてける哉

○所感　番町　不倒翁

かまど山たみの烟りのたえしより常のこゝろのたゞすあり行

○魁梅　靜岡　町田清子

さきかけて春しり顔のうめの花こぞのゆき間を忘れるなゆめ

○御伽草

○大雪

或家に興がる白痴者ありけるが大雪の降し朝た其主人此に用を申し附けたるに。何ぶん雪ふかくして參り難しと申しけるゆゑ主人ハ否々左ほとの雪にも有まじと云ハ白痴者ハ窓を明て彼れ御覽しませ原サが七八寸巾ハ限りが御坐りません

○

道具屋の見世へ官員風の人が來りて。コリヤ此の花瓶ハ幾らじや。ハイ夫ハ古伊萬利で御坐ります七十五錢に仕ります。ソレハ高い最と負るがよひ。イエ決して掛直ハ御坐りません。フウ亭主ハ留主か家に居らハ負て呉やうに貴樣ハ埒があかぬと云ハ。ハイ私くしが亭主で御坐ります其樣に此品に掛引ハ御坐りません。ナニ嘘を云へ貴樣ハ此處の亭主でハ有まい先達て見たとき十四錢に賣ふと云た者を貴樣ハ亭主でハ有まひ。イエ〳〵亭主に違ひハ御坐りません。イヤ〳〵亭主でハあるまいと云に予亭主ハ大きにせき込其花瓶を取て末塵に毀し。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ナンと是でも亭主でハ有ませんの

○短氣ハ損氣とハ此等をや云ならん

○短かき文

白痴たる女子文をしたゝむるにまいらせ候をかず限りもなく書て更に用が便ぜざりしかは或人異見して文ハ用向の便るを旨とすれば短かきが上にも短かく書を上手とすれバ左樣心ろし給へと云けるゆゑ其の女子心得て去る方へ遣ハす文に一筆しめしまいらせ候かしくとのミ書てつかハしけると

○理ハ附ものにこそ

家隆定家の方へよみてつかハしける歌に

とにかくに若きハ猶も頼みあり定めなき世に老の身そうき

斯くをくりけれバ定家卿の返事に

とに角に老ハあまたの年も經つ定めなき世に若き身そうき

○庸醫

去る醫者へ盗人しのび入り掛時計を盗んで逃る所を細君目を覺してアレ賊がと所天をゆり起せバ醫者殿ハ己れと云てはね起るを賊ハ一生懸命に手向すると切殺すぞと刀を抜かくれば醫者ハ藥り函より刀圭を取いだし此でもかとひらめかして見せければ盗人ハ肝をつぶし時計を捨て逃さりけり細君餘りの事に合點ゆかず如何した譯と聞けば醫者殿ハ濟しゐる顔をして。

サレバサ此刀圭で幾らか人を

怖れても怖るべき名ハ高くして其實庸醫の輩なり

◎机の塵

○歴史の名乘の讀方

●朱雀帝の御諱寛明ハゆたあきら●三條帝居貞ハいやさだ●後堀河帝茂仁ハとよひと●近御帝體仁ハなりひと●後土御門帝成仁ハふさひと●四條帝秀仁ハみつひと光明帝豊仁ハゆたひと●後水ノ尾帝政仁ハことひと●藤原ノ宇合〔馬養とも書す〕うかひ又うまかひと讀ハ非なり萬葉集に乃幾阿比と訓せり之に從かふべし●一條禪閤兼良ハかねら●最上義光ハよしあき●大友義鎮ハよししげ●石田三成ハかづしげ〔藤堂氏幷びに伊勢一身田に所藏の石田の假名文に皆な假名にてかづしげとあり●織田信雄ハのぶかつ●瀧川一益ハいちます

右の外なほ多かなるべし今心つくまゝに記す

○羽根つきの歌

娘子供が羽根をつく歌に一ごに二ご三わたし四め子云々と云あり此れ何の義理やらと思ひゐしが此ころ不圖寫本を見しに

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

左の註釋ありたり實に古人の心を用ひしを思ふに堪たり
子供の魂しひは百までとやらん聞はべり左れば幼稚ときより敎訓の歌を覺へしめば成人の後ち必らず益あるべし此ころ道路にて小女が羽根つきの歌を聞くに左の如し

一とりの子に二人の親三(身)は四め(嫁)でに行て五つの昔しに七の八くそく九こまで來ら十一(留)まれ

末の句は一度歸ば再たび歸らず留まれの意なり今うたふ所ろは此より訛まり來りしならん

○小袖といへる名稱の事　　大松つま子投

上古は裝束の下ゑ着する衣服をは袿とて袖を大にしひろ袖にして着しるなりその袿の袖の大なるに對して常の衣服をは小袖といへり。かたびら單物あわせにても袖を小くして袖下を丸くしたるは皆小袖なり綿入たるをのミ小袖といへるは古義にはあらずと貞丈雑記に見えたり

○かいどりと云ふ名稱の事

貞丈雑記に云く女の帶したる上に小袖をうちかけて着るをうちかけといふ今も京大坂なとの人はうちかけといふなり又江戸の人はかいどりといへりそのいどりと云事も古く徒然草なとにかいどりすかたなと見えたるはかの袿のつまを取りたるをいふなり小つまをかいとるおと〻云も同じ詞なり

○管公の像

管公の自畫の像とて各所にあり大方黒き袍なり其時代黒きは椽とて喪服なるうへ四位以上の黒き袍を着するとは建曆より後のとにて管公何ぞ自から黒き袍に畫せ給はんや且つ其頃の袍は袖もちいさく際ふちたる物にあらず今世の○○○裝束を見て畫きし物ゆゑ今様の裝束したも黒々と染て是ぞ管公の自畫なりと披露するは沙汰の限なり

○早婚

近頃早婚の弊習を擧て種々なんずれと此は濫りになりしに非ず昔し政府に於て定められしなればなり此頃令の戸令を見しに男年十五女年十三以上聽婚嫁と在り上代は多く早婚せしよや日本武尊十六才ゑてあまた王子おはしたるにても知らる〻なり

○樒　　根岸　山田天祿

貴社向に樒の辨と云を記されたる吾儕もつともと同じふる際桂秋齋の問話を見しに曰く神祇拾遺といふ書に愛宕にて樒を求め來る事むかしは榊なりしに佛法に混せられて今は樒に成たるよしをのせ たるぞ いふのし。愛宕の樒が原は名所にて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

藻汐草に見へたり曾根好忠 わたご山しきみが原に雪つもり
花つむ人のあとたえもなし 此の歌方輿集に出る。樒を佛事につかへバとて忌も恐なれや六十六ヶ國え二嶋をのけて有としあらゆる物ハ皆な我國の物なり樒に限りて悪む心のせハきも慣れにて名所の草木を取てかざしにすると稲荷の杉加茂の葵い榊のみ神國の物なりや狭少の才なるかな。云々と見へたり實に去るとぞかし

◎内外雜報

●早婚の弊害 先頃軍醫學會にて渡邊晰氏の演説せしと云ふ婚姻を早くする弊習と云ふ大意を聞くに日本人ハ西洋人と違ひ身体も羸弱く且つ忍堪の力も乏しく末々の事業重大の發明等をなすに耐ざるハ畢竟早婚の悪習の為す所ならん今西洋各國と我日本とを比ぶれバ毎婚姻に産れ兒の少なきと毎出産に死産の多きと人口の割合に結婚離婚の多きハ日本を以て第一とす故え結婚ハ年齢男二十五年女二十年より早く婚姻するとを禁じたしと云にありしと

◎西班牙國皇帝崩御遺聞 西班牙國皇后クリスチースハ去る十一月二十八日回國憲法に對して御宣誓あり今其の式を聞くに新任大臣一統参内の上内閣總理大臣サガスターハ先つ御前に進み憲法の成規に從ひ左の如く奉問せり

陛下ハ上帝及び福音聖書の前に於て帝位承繼者の幼年中之に忠實なるべきこと並に憲法及び法律を遵奉すべきことを誓はせ賜ふや又陛下ハ國會の開設に際し會塲に於て再び此の宣誓を為さん事を約し賜ふや

皇后宮ハ誓書の前に跪き右の御手を其の上に置き此の奉問を聴かせ賜ひしが此の時嚴正なる御聲にて式語を覆言し賜ひ左の御言あり

予ハ之を誓ひ切に上帝の加護を祈る

次いで諸大臣に向ひて左の御言あり

予ハ一婦人たるに過ぎず然るに予ハ幼稚なる女兒二人を有し他日善良なる西班牙婦人と為さんことを望み切に國民の義氣及び慈心に依頼す又予の一身に至りてハ予ハ不幸なる亡夫の行為に倣ひ傍ら諸大臣の意見を聴きて以て之を處し國内不穏なる時に於てハ立君黨首領の意見を聴き協議の上政務を處分せんと欲するなり

〔以下次號〕

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

驛遞局認可

廣告

● **教育報知** 毎月三回發刊 第十七號既刊

廿八字詰二十三行、三段二頁、一冊廿六頁、乃至廿頁、一部定價五錢十部前金四十五錢一冊郵税一錢

本年ハ現代ノ教育家カ日本ノ教育歴史上ニ新世界ヲ畫ン後世ハナシテ明治中興ノ教育ハ十九年ニ其萌芽ヲ顯ハシタリトノ評判ヲ博スヘキ時機ニ際會セリサレバ我カ教育報知ハ現代ノ教育家ノ爲メニ敏捷活潑ノ働キヲナスヘキハ勢ノ止ムヘカラサル所タリ故ニ自今毎月三回ノ發行トナシ且ツ紙面ヲ改良シ價格ヲ低廉ニシ以テ購讀諸彦ノ便利ヲ計リ加之記載ノ事項ヲ精撰シ文章ノ平易ヲ主トシテ教育ノ理論及ヒ方法ヲ論述シ學術ノ溢義及ヒ應用ヲ解釋シ或ハ學術上ノ疑問ニ答ヘ内外學事ノ景況ヲ記載シ高徳者ノ資行訓言ヲ掲示シ又有益ナル教育書ヲ著譯シ之ヲ毎號ノ附錄トナシ積ミテ一部ノ書冊ヲナサシムル等聊カ從來ノ面目ヲ改進シ以テ教育世界ノ耳目タルニ背カサラントス有志諸彦幸ニ愛顧ヲ賜ヘ

東京本郷元町一丁目三番地
教育報知社

社告

地方愛讀諸君の中本誌第十號まで御拂入の分は最早來る三月六日第壹土曜日にて發送濟に付前金相切さる前御入金可被下候若し御送金無之に於ては發送見合候間豫て此段申上置き候也

會計掛啓白

發行所 東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地 **績文舍**

持主兼印刷人 松本義弘
編輯人 山田常治

女學叢誌賣捌所

東京芝區愛宕町一丁目三番地 大賣捌所 **修正堂**

同 神田區雉子町	團々社
同 日本橋區新葭町	良明堂
同 牛込肴町十七番地	活神堂
同 芝區愛宕下町二丁目	高櫬堂
同 蠣売町貳丁目	信文堂
同 本郷區本郷元富士町二番地	盛春堂闘田
同 同 本郷春木町貳丁目	解明堂
同 元數寄屋町壹丁目	東海堂
同 神田區淡路町	巖々堂
大坂 府備後町四丁目	岡嶋支店
千葉 縣千葉本町一丁目	立眞舍
藝州 廣嶋大手町一丁目	早速社
江州 彥根西内大工町	新々堂
陸前 國仙台大町四丁目	木村文助

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY